

ONAIR

NO. 114

放送大学通信 オン・エア

発行月 2014年6月

発行 放送大学

〒261-8586 千葉県美浜区若葉2-11
043-276-5111 (総合受付)

CONTENTS

学位記授与式	1
学生座談会 ～“学び”の成果を地域へ～	6
第6回エッセイコンテスト	10
研究室だより	12
学習センターだより	13
2014年度開設改訂科目紹介	14
国際シンポジウム/就任のごあいさつ	18
インフォメーション	20

学位記授与式が行われました

2014年3月21日に、2013年度学位記授与式がNHKホールにおいて挙行されました。卒業証書・学位記授与の後、学長式辞や、上野通子文部科学大臣政務官、松本文明総務大臣政務官などのご来賓の方々でご臨席され、卒業生・修了生の代表が謝辞を述べました。

学長表彰として、名誉学生の方々の表彰があり、そして今回より始まった「放送大学優秀授業賞」を臼井永男教授が受賞され、最後は、学長指揮による学歌斉唱で2013年度の学位記授与式は幕を閉じました。

学長式辞 学長 岡部 洋一

本日、めでたく卒業を迎えられた卒業生の皆さん、また修士論文をまとめられ、修士課程を修了された皆さん、ご卒業おめでとうございます。本学の教職員を代表して、心からお喜び申し上げます。また、皆さんをずっと支えてこられたご家族、友人の方々も多数お見えかと存じます。どうか、皆さん全員で卒業の喜びを分かち合っていたいただきたいと思います。

また、本日は、文部科学大臣政務官、総務大臣政務官を始め、多数の来賓の方々をお迎えし、かくも盛大な学位記授与式を挙行できました。誠にこの上ない喜びであります。

2013年度は奇しくも放送大学創立30周年、さらに全国各都道府県の学習センターで全科履修生の受入れを開始し、当時のCSデジタル放送によって全国放送を達成してから15周年という節目の年にも当たります。本学は、設立当初より、入学試験のな



い公開された、生涯学習のための通信制大学として設立され、その理念は現在でも十分通用しており、設立当初の理念の素晴らしさを改めて感じるものがあります。

さて、本学は教養学部あるいは大学院文化科学研究科という単科大学であり、学部、大学院とも教養教育を行う大学です。本年度は、いろいろなことから、改めて「教養」とは何かと考えさせられる



岡部 洋一 放送大学長



下段中央の政務官の名を挟んで
総代のみなさん



年になりました。ひとつのきっかけは、大学院博士後期課程、いわゆる博士課程の設置を行うこととなったことです。博士課程の形を考える際、本学は非常に広い分野に疎らに教員がいるという状況なので、一般の大学のように、近い専門分野に多くの教員を抱えていて、狭い分野に特化した専門家を育てるような形には向いていません。一方で、日本の博士号取得者は自分の専門に固執し、欧米の博士号取得者のようなフレキシビリティがないという批判もよく耳にします。そこで、欧米のように広い教養を持ち、かつ同時にある分野だけを深く研究する形の博士育成ならば可能ではないかというイメージが出来てきました。こうした形を「T型人間」というのだそうですが、縦太の人間ではなく、横長の教養とやたらに太くない縦の専門を合わせ持つ人間を育てようということになりました。つまり、一般の大学に比べて申し上げますと、放送大学の博士課程の修了生は、T字の横の部分が長い、つまり広い教養を持つことで、様々な分野に比較的容易に興味を持つことができるだけでなく、縦の部分、つまり専門性についても研究を修めることによって訓練を受けますから、どの分野でも幅広く仕事ができる人が育つのではないかと考えています。それでは教養学部はどういう位置づけにあるのかというと、もっと横が太く、縦が細いと理解していただければと思います。修士、博士となるにつれ、横が細く縦が太くなるというイメージです。しかし博士になっても横が無くならないことが重要だと考えています。

つまり「教養」とは、身体機能で言えば、基礎体力のようなものではないかと考えています。もちろん基礎体力に加え、各分野に特化した専門力はあった方がよいのですが、基礎体力のある人は一般的に新分野に対する適応力が強く、専門力を直ぐに修得できるものなのです。逆に専門力だけのトレーニング

を受けた人は新分野に対する適応力が低いことが多いのです。広い知識と、いろいろなことを理路整然と考える考察力、それにこれが一番重要なのですがどういう分野でも力を発揮できる実行力、そういう基礎体力を皆さんは得たのです。教養学部の卒業生の皆さんを始めとして、卒業されてから大学の外で身につけていく専門性は、このような知識、考察力、実行力に裏打ちされているのだということを念頭に置いて、どんどん社会に貢献していただきたいと思います。

以上のことから、第二に申し上げたいことは、皆さんにはぜひ「本学の卒業生・修了生であることに、誇りを持っていただきたい」ということです。本学は、学力試験を課さない誰にでも開かれた稀有な大学でもあります。通信制大学であることにより、世間では大した学力がないのではないかと誤解されておられる方も多いと思います。しかし、本学は、入口は誰にでも開かれているが出口は厳しい大学なのです。皆さんもご経験のあることと思いますが、単位認定試験は非常に厳格です。さらに、放送授業を受け持たれている専任教員や客員教員は、著名人が多いことは言うまでもなく、常に教育の質を意識されています。また、広く浅い教養教育を批判する人も多いのですが、先にも述べたように、社会への高い適応性を育てていると思っています。非常にレベルの高い大学を卒業したということに自信を持っていただきたいと思います。

第三に申し上げたいことは「本学で取得した知識や手法を、いろいろな局面で生かしていただきたい」ということです。既に仕事を持っている方、あるいは今後仕事に就かれる方は、仕事という現場で、自分の基礎体力を遺憾なく発揮していただきたいと思います。また、仕事には就かないという方も、社会貢献や地域貢献といった活動で、まさに社会に還

元していただきたいと思います。

本学に在籍したことにより、力強く生きるすべ、したたかに生きるすべを得たのだ、それを力に他人

に優しい、包容力のある人間になっていただきたいと念じて、改めて、おめでとうを申し上げ式辞とします。

謝辞

教養学部卒業生代表
心理と教育コース 藤原 朋子

本日は、私たち卒業生のために、このような盛大な式典を挙行して頂き、誠にありがとうございます。お忙しい中、ご臨席頂いた諸先生方、ご来賓の皆様には、心より感謝申し上げます。

私は兵庫学習センターに所属し、心理と教育コースを専攻し、学習を続けて参りましたが、今、こうして学士の学位を頂けることを、小さな奇跡のように感じています。

私は、長い間、高等教育を受けることを望みながらも、それがままならない環境にいました。子供の頃は家庭の事情と自分の病気があり、大人になってからは阪神・淡路大震災に遭遇し生活の再建が最優先となりました。40歳を過ぎて大学進学というかつての夢が放送大学のおかげで叶いました。

はじめは、仕事と勉強が両立できるのか、学習レベルについていけるのか、不安な気持ちでした。けれども神戸の狭い部屋の中で一人、通信機器を通して講義に耳を傾けているうちに、真摯に学問を研鑽されている先生方から分けて頂ける知識に感動し、次第に夢中になっていきました。

卒業研究では、カーラ・チャクラ曼荼羅というチベットの密教曼荼羅についてユング心理学の視点から考察を試みました。私はNGOの仕事に携わっており、縁あってチベットやネパール、インドなどに住む人々と長年関わってきました。フィールドで感じてきた東洋の心のあり方と、心理学という西洋に原点を持つ学問の、両方に共通している、人間の内なる根源的なものと取り組んでみたいと思っていました。ご指導を賜った大場登先生のおかげで、それは同時に、自分の中にも埋もれていた根源的なものと向き合うプロセスと繋がるものでもあることを意識するようになりました。大場ゼミの卒業研究を通じて、逆境にある世界のさまざまな人々の心と向き合うということは、実は、自分自身の心の中の逆境にある存在と向き合うことでもあること、そのことを意識してこそ、はじめて臨床心理学という学問のスタートに立てるということ、身をもって理解できたように思います。

時には仕事と学習の両立が難しく、体調を崩したり辛くなったりすることもありましたが、神戸から東京へ行けば卒研ゼミの仲間達との繋がりをうれしく思い、また放送授業を聴けば、どこかで同じ講義を受けている、学びたいという同じ志を持った人々がいることを励みに感じてきました。

目には見えないけれど豊かな繋がりを、放送大学の学習から受け取っていたような気がしています。それは同時に、知恵や知識を求めて止まない思いを持った世界中のあらゆる人々との場所と時間を越えた繋がりで



でもあったような気が致します。世界にはさまざまな理由を抱えながら高等教育を受けたくても受けられない人々が、たくさんおられると思います。近年は通信技術の環境が整備され遠隔学習のシステムも発展していると知りました。私は放送大学を卒業できたら、今までなら諦めていた人々にきっと言おうと思っていました。例えば、ネパールの山奥の村の少女にこう言うのです。「本当に勉強したいのなら方法はあるよ」「私もそうやって勉強したのよ」と。このネパールの山奥の少女というイメージは、実際に私がネパールで出会い関わってきた現実に存在する少女でもあります。同時に、彼女は私の心の中にいる、学びを渴望していた少女なのだとも思います。

開かれた大学、Open Universityで、どのような境遇にあっても、私たちは、それぞれの持ち場を離れずに学ぶことができ、だからこそまた学んだことをそれぞれの境遇に生かすこともできます。持ち場を守りながら学び続ける中で内なる、あるいは外なる、実に貴重なものに会うことも、そして、ひょっとすると奇跡が生まれることもあるかもしれません。そんな貴重なものや奇跡が、現代のこの困難を極める世界の現実の中にもあることを願い、信じて、これからも学び続けてゆきたいと思います。

今回、私は自身の準備不足もあって、残念ながら放送大学大学院とはご縁がありませんでした。それでも幸い、放送大学で書き上げた卒業論文を提出しての入試面接を経て、奈良の大学院に入学が決まり、4月からさらに臨床心理学を学び進められることとなりました。これから放送大学を卒業した誇りと自信と繋がりを礎に、一步ずつ進んでいきたいと思っています。

最後に、私たちを見守り支えてくださった友人、家族、導いてくださった放送大学の先生方、お世話になった職員の方々、関係者の皆様、改めて心から感謝を申し上げます。ご臨席の皆様のご健康とさらなるご活躍をお祈りいたしまして、卒業生を代表しての謝辞とさせていただきます。

謝辞

大学院修了生代表 文化情報学プログラム 内山 雅淑

春分の日の今日、教養学部卒業生同様、わたくしたち大学院修了者のためにも、このような華やかな門出の式典を開いていただき、また、ただ今は来賓の方々並びに学長より、多分のご祝辞をいただき、まことに感謝いたします。

思い返せば二年前、私たちは、それぞれの研究課題と研究計画とを掲げて、本学大学院生としての歩みを始めました。プログラム毎に個々の特色はあるものの、修士論文の作成・提出と口頭試問まで奮闘努力して参りました点は、皆同じです。孤独ではなく、孤高な学問研究を進めてきた「同志」として、式典に相臨み、顔を合わせ、互いの健闘をたたえ合っている心境でございます。

実は、私にとって、通信制の大学で学ぶのは、これが二回目です。最初は、もう35年程前、京都の佛教大学で教員免許を取得したのがそれです。その後、大阪府公立中学校の社会科教員として奉職してまいりました。今から七年前、母の認知症の重症化と父の母に対する在宅介護の限界から、55歳で教職を若年退職し、郷里の浜松で、両親をサポートするべく、単身赴任的な生活を始めました。やがて母は家に近い高齢者専用の病院に入院し、一昨年二月に、静かに息を引き取りました。臨終に付き添うことができ、一人息子として本望でした。この間、両親を世話する合間の時間を有効活用しようと、地元の調理菓子専門学校に入校しました。調理師や製菓衛生師、2級製パン技能士などの資格を得る反面、授業等で見聞する食物関連の歴史の定説的な内容に多くの疑問を抱くに至りました。頭よりも手、理屈よりも実践、そんな環境の中で、敢て、自分なりに歴史の真実を求めようと、放送大学の大学院修士選科生として入学し、翌年、自らの研究計画を練り上げ、修士全科生となった次第です。私の人生における新たな出発を、二度も通信制の大学が後押ししてくれました。なお、父は来月に90歳となり、ますます元気で、好奇心も旺盛です。現在、父の放送大学入学への誘いを密に行っているところです。

さて、私の研究テーマは、17世紀のウィーンの食文化の歴史にありました。宮下志朗先生と井口篤先生の合同ゼミに参加し、ほぼ半年ごとに研究レポートをまとめ、それをレジュメ化してゼミ参加者に目を通していただき、その反応から、次回の研究テーマを設定していく方法を探りました。ただ、このテーマに関しては、わが国には先行研究や史料に乏しく、私は、実際に幾度かウィーンの地に赴いて、大学図書館や王立図書館、市立図書館さらには古本屋に足しげく通い、研究のための史料・書籍を集めることに奔走しました。

課題の三つの研究レポートは何とか作成できたものの、最

大の難関は、自らの研究テーマの論旨に則って、各研究レポートを連結させ、論文原案を練り上げて行く作業でした。丁度、去年の11月頃です。私の場合、修士論文提出の一ヶ月前に宮下、井口両先生に論文素案を見ていただく



計画を立てていたもので、わけても11月前半は悪戦苦闘の連続でした。しかし、何事もやってみなければわかりません。直前の10月当初のウィーンでのフィールド・ワークの成果が良質な接着剤となって、うまい具合にそれぞれのレポートは繋がり、それなりにまとまりのある作品に仕上げることができました。論文を読んでいただく方を念頭に、分かりやすい文章表現や資料のレイアウトに工夫を凝らしたのは言うまでもありません。ただ、何度何回文章を書き直しても、誤字・脱字君は最後まで私のお友達でした。

今般、放送大学大学院を修了するにあたり、修了生だから見えてきた放送大学大学院像を、ここに三点述べさせていただきます。

まず、第一に、教養学部卒業生同様、修了生のほとんどは、入学金や授業料は自分持ちです。出発点は自らによる自らへの投資です。このことはとても大切です。修士論文を作成するという、学問に対する「覚悟」が各人に備わっているのは明白です。質の高い研究者の卵の集合体といってよいと思います。

二つ目は、研究指導者と適度な距離を保って、自らの研究を進めることのできる良さです。もちろん、肝心なところでは、何回となくご指導と激励のメールをいただきました。度量の大きな研究指導者に恵まれているのも、放送大学大学院の特色です。私個人は四月から他大学の大学院博士後期課程に進学しますが、この地で培った「適度な関係」を彼の地でも自ら築いていく所存です。

三点目。実は、私の眼前におられます岡部洋一学長は、私の出身高校の8年先輩に当たります。出身小・中学校はお隣同士で、かつて浜松のどこかで互いにすれ違ったこともあったのではと思います。古稀の先輩はコンピュータを始めとする電子工学の権威であり、還暦を少し出た後輩はやっと歴史学の入口にたどり着いた者ですが、今、こうして岡部先輩は放送大学の代表として、後輩の私は修了生の代表として、壇上で対面している不思議さを思わざるをえません。これこそ放送大学大学院ならではのサプライズではないかと思っています。

最後に、ご列席の来賓の方々、諸先生方、大学本部並びに学習センター・サテライトスペースの職員の皆様方のご健勝と、30周年を迎えたわが母校放送大学の教養学部と大学院、とりわけ新設の放送大学大学院博士後期課程^{いやさか}の^い弥栄を祈念して、答辞といたします。

卒業・修了祝賀パーティーが 開催されました



NHKホールでの学位記授与式の後、場所を移動してホテルニューオータニにて卒業・修了祝賀パーティーが行われました。

パーティーでは岡部学長、斎藤同窓会連合会長の開会の辞や白井理事長の乾杯のご挨拶の後、退任された教員を代表して、松村祥子先生から「今日、ご卒業された皆さんとわたしたち退任する教員は、

同期生ですの、これから

よろしくお願いします。」と退任のご挨拶がありました。会場からは温かい拍手で、退任された先生方をお送りしていました。



卒業生・修了生にインタビュー



3回目の卒業です。2回目の時に発達と教育で学んでいました。その時はただ順番に科目を取っていただけでした。今は、児童館長をしているのですが、当時学んだ子どもの心理などが、仕事の役に立っています。まさか当時はそれが後で役立つとは思いませんでした。

加藤経子さん(愛媛学習センター)

助産師として働いており、大卒を目指して勉強をしていたのですが、途中から学ぶことが本当に楽しくなってきました。次は大学院を目指して、まずは修士選科生として学びます。

(右から2番目の目黒和加子さん)



↑石丸ゼミのみなさん



↑学長を囲んで

私にとって放送大学は、多くの科目から自由に学習できたこと、学ぶ楽しさ、知らないことを知る喜び、放送大学での学習は感動の連続でした。学ぶことを生きがいに生涯学習として放送大学で学び続けます。

石松艶子さん(大分学習センター)



今回9年で卒業です(通算4回卒業)。年齢80歳。マイベースの学びに、埼玉学習センター所長より生涯学習奨励賞をいただき感激です。次は情報コースに入学します。

山田之人さん(埼玉学習センター)



16人という大所帯のゼミでしたが、島内先生がてきぱきと一人ひとりのテーマについて洞察力するどくご指摘くださって、お蔭様で全員そろって卒論を書き上げることができました。

(右から2番目の安部弥生さん)



↑袴姿の卒業生



↑島内ゼミのみなさん

“学び”の成果を 地域へ



放送大学では新しい地域貢献リーダーを育成するために、昨年度21の地域貢献プロジェクトを立ち上げました。今回はそのうち和歌山・北海道の両学習センターで中心的役割を担われたお二人を、そしてすでに地域のリーダーとしてご活躍のお二人を宮城・福島の両学習センターからお招きして、その活動内容、地域貢献にける思いなどをお聞きました。

※本文中は敬称略とさせていただきます。



(左から)宮本教授、畠山さん、安武さん、及川さん、齋藤さん

ご出席いただいた4名の学生の方々

安武 史さん(和歌山学習センター) 及川 敦子さん(宮城学習センター)

畠山 真明さん(北海道学習センター) 齋藤 鈴子さん(福島学習センター)

司会

宮本 みち子 教授(放送大学副学長)

“学び”の仲間に支えられて



宮本 本日はお集まりいただきありがとうございます。放送大学は社会人を多く擁し、すでに多くの方が地域貢献に携わっています。その歩みをさらに加速すべく放送大学では地域貢献の具体的な“見える化”に取り組んでいます。その一環として昨年、学生を対象に行ったアンケートによると「地域、社会に役立つことをしたい」学生が一般の同年齢の何倍もいることが分かりました。そこで、本日はその代表である、そしてすでに地域貢献に取り組まれている皆さんにご出席いただきました。どのような地域貢献活動をされ、それは放送大学の“学び”とどのように結びついているのか。また地域貢献リーダーを育成する上でのアイデアなどをお話いただけたらと思います。では、安武さんからお願いします。

安武 和歌山学習センターの安武と申します。認定心理士の資格を目指し「心理と教育コース」で学んでいます。婚家がお寺で里子を預かるなどしており、

その活動に役立つのでは、というのが入学の動機です。私たちの地域貢献プロジェクトは学習センターの呼びかけから始まり、私を含め約10名の学生が集まりました。少子高齢化による人口減少とコミュニティ崩壊

を背景に「地域の活性化」をテーマとするのはどうかという意見が出たので、そこで私は、自分の暮らすかつらぎ町新城地区——山中の過疎地で放っておけば限界集落になってしまう同地区を対象地区にと提案。それが採用され、まずは実態調査をと昨年の9～12月に戸別訪問による地域調査を行いました。こちらが



(写真1)

その調査報告書です(写真1)。当プロジェクトは前センター長、八丁先生のご発案で、この報告書の編集にもご尽力いただきました。今はこの調査をもとに何ができるか、同地区の人に提案するための準備中です。

宮本 地域貢献活動は地域ニーズを知ることが出発点となりますね。

安武 もとものの同地区のニーズとして、人口減少が進む中どうやって若い人に来てもらうか、が課題でした。30年ほど前、小学校が廃校になるという危機を契機に同地区では山村留学に取り組み、300人近くの子どもを受け入れてきました。大人となっても里親さんのもとを折々訪ねるなど交流は続いています。そういう若い人にどうやって来てもらうか。親族も含めて縁のある方に来ていただけるよう、その縁作りの必要性を活動の中で強く感じました。

宮本 次は若手ホープの畠山さん、お願いします。

畠山 北海道学習センターの畠山です。「社会と産業



コース」で経済学や労働法などを学んでいます。私たちの地域貢献プロジェクトは、「地域活性化活動の広報と実践プロジェクト」というもので、北海道が課題とする「観光」「在宅医療・訪問看護」「産業」「食・農業」の4分野において地域貢献活動に積極的な企業のリーダー4人にインタビューを行い、ラジオの30分番組で8回放送しました。私たち3人のグループは司会を交替で務めながら、リユース&環境関連事業を展開する（株）エコノスの長谷川社長にお話を伺いました。カーボンオフセット事業などグローバル展開されている部分と国内リユース事業とをどうやって両立させているのか興味がありましたが、「エコロジーとエコノミーの共生」という共通の地盤があり、社員、お客さま、地域を互いにWin-Winの関係で結ぶという理念経営を目指しているとお聞きし感銘を受けました。私たち若者は普段、社会的立場のある人の話を聞く機会が少なく、その機会をいただけたことは貴重な体験となりました。

宮本 あとのお二人も畠山さんが中心となって活動されている若い人の交流サークル「Youthful」のメンバーですね。このインタビューはサークルやご自身にどんな影響を与えていますか。

畠山 引き続きインタビューを続けよう、という話は出ていますが、それをどうやって活かすかという答えがみつからず止まっている段階です。ただ、この活動を通して得たものは大きかった。マイクを前にインタビューしてOn air、なんて全員が初めて。センター長からお誘いを受けた時には正直、どうなるかと。でも動き出してみると周りも動いてくれて、何とかなるという自信のようなものが身に付きました。引っ越しを繰り返した私にとって同じ地にこんなに長くいるのも初めてで、あまり自覚していなかったのですが、インタビューやサークル仲間との交流を通して札幌に強い愛着があることがわかりました。卒業したら東京ではなく札幌に就職し、地域に役立つことをしたいと思っています。

宮本 力強いメッセージをありがとうございます。次は及川さんにお話を。及川さんは副看護師長として勤務する石巻市立病院で津波に遭われています。

及川 病院は津波で壊滅しました。あれから多くのことがありました。その後、避難所支援や仮設住宅巡回活動に従事しました。私が担当した仮設住宅は、雄勝・北上・河北という過疎地区。今でも光景は変わりません。瓦礫が少なくなったぐらい。私の方が近いからと志願しましたが、それでも1時間かかります。1時間かけて出かけ1時間ケアして1時間かけて戻る。採算はゼロです。でも、看護を求めている人はたくさんいらっしゃいます。このままではいけない、患者さんにもっと寄り添わなくては、の思いから昨年5月1日に訪問看護ステーション「てあて」を立ち上げました。が、立ち上げから3カ月は診療報酬が入りません。私たちを待っている人がいる、患者さんの“頼むから潰れんてよ”“てあてが無くならないか不安で夜も眠れない”の言葉に励まされ、頑張りましたね。そして、1年――皆で「よく持ったね」と言い合っているところです。資金もなく“思い”だけで突入した、という感じです。

宮本 3.11以降、及川さんは先頭に立って寝る間も削って活躍されました。放送大学での“学び”が何か影響を与えていますか。

及川 放送大学には、問題意識を持って入学される学生が多いと思います。そして“学び”を通して、理論なり裏付けなりを得て回答を導き出す。どこに働きかければどう変わるのかといった、そんなツールを多く学べるのが放送大学です。また、学生の皆さんは社会人としてさまざまな財産をお持ちで、その一コマに接するだけで私の視界は広がります。その経験と“学び”で得た知識は、私の活動に多く寄与しています。何よりも嬉しかったのは、卒業研究を指導して下さった奈良先生が被災月に石巻を訪れて下さったこと。この時ほど放送大学の学生で良かったなと思ったことはありません。モノの無いときには送ってくださり、交通手段がないと申し上げると自転車を送ってもくださいました。いろいろな意味で支えとなっていただき、感謝に堪えません。ゼミの仲間からも多くの支援を頂戴しました。潰れてしまいそうな時、助けてくれる人がいる、見られている人がいる、というのは大きな励みとなって



及川敦子さん



畠山真明さん

その度に私の背中を前へと押してくれました。

宮本 では福島学習センターの齋藤さん。齋藤さんは入学以前から地域貢献活動をなさっていますね。

齋藤 夫の最後の転勤で、私たちは郡山市のニュータウンに居を構えました。それまで幾度もの転勤を繰り返す度に、地域の方との出会いを大切に心がけていましたが、今度はロングランです。地域で何か役立つことをしたいとの思いから、私はまっ先に公民館を訪れました。そして、いろいろな事業に参加し地域の方々と関係を深めていくうちに保護司、人権擁護委員、介護サービス相談員等のボランティア活動をさせていただくことに。でも、何れも人に寄り添う仕事で、その人の人生に向き合わねばなりません。私は一人分の人生観しか持ち合わせていません。人間とは？ 社会とは？ 人権とは？ 自分とは？ という根源的な疑問が沸々と湧きあがりその答えを求める毎日でした。そんな折り、放送大学の案内書を目にしたのです。門は広く開かれている、思った時が一番！と夫の退職を機に私は“学び”の世界へ飛び込んだのです。平成20年「心理と教育コース」に入学、昨年卒業し、今は「生活と福祉コース」で学んでいます。

宮本 放送大学の“学び”は、いかがでしたか。これまでの活動に何か役立っていますか。

齋藤 はい。どの科目も光彩を放ち、角度を変えようとまた別の世界が広がる…まるで万華鏡を覗き見るような魅力あふれるものでした。そして、“学び”を通して知り得た多くの事例や解決策は私の活動の大きな糧となっています。私の出会う方々は個々に複雑なものを抱えておられます。生い立ちや生きざま、家庭環境、社会背景…時には自分が受け止めきれないケースも。そういうものを理解するのに、学問的アプローチを試みると何か整理がついた気がして、またその人に対峙できる、そんな力をいただきました。ただ、そのために科目をあれもこれもと欲張りすぎて終いには悪戦苦闘、特に卒業研究への挑戦は本当に苦しいものでしたが得られた達成感は大きいものでした。

ある時、面接授業のレポートに先生から「学び方には『やさしくて分かりやすいから楽しい』もいいけ

ど『難しいけど楽しい』もいい、『難しいから楽しい』はもっといい」という言葉をいただきました。

私にとって放送大学での学びは『難しいから楽しい』の入口あたり。これからも「学び方の楽しい」を追求して地域活動に活かしていきたいと思います。

宮本 ありがとうございます。皆さんのお話を伺いました。では、私から。地域貢献は家の中にはできません。皆さんは家の外、社会へ踏み出された訳ですが、安武さん、今回、その一歩を踏み出させたものは何でしょう。

安武 いつかはやらなければならない—そのことは分かっていました。自分が高齢になった時に新城地区に人がいない、この危機的状況を何とかしなければ、と。そんな折り、学習センターから声をおかけいただき、これは今がやるチャンスだと。実際一人ではやれなかったと思います。同地区にも同じ考えを持つ若い人はいますが、私がそうであったように子育て中で、一人ではなかなかその一歩が踏み出せません。せっかく大学の後押しをいただいたのです。このチャンスをムダにしたいくない、との思いと多くの人の協力を得られたことが原動力となりました。

宮本 そうですね、なかなか一人では…。学習センターの声かけがきっかけとのこと。そんなきっかけ作りに結びつく授業の提供など放送大学としても考えているところです。そして、一人ではなくみんなの協力を得て、という点も大事ですね。放送大学は通信制の大学ですから仲間作りが難しい面がありますが、畠山さんは果敢に挑戦して、サークルを作りましたよね。

畠山 地道に一人ずつ、面接授業の際に隣の教室などを覗き、若い人を見つけては声をかけています。もちろん断られることも。でも続けて良かった。一人で勉強するのは辛く続かない、だから交流の場を—それが「Youthful」です。ボランティアも一人では気が重いですが、皆と一緒にだと楽しい。そんな皆だからこそできるテーマを選び活動しています。

宮本 誰かと一緒に何かをするというのはとても大事ですが、今の社会に欠けている部分です。それだけに初めに声かけする人の役割は重要です。及川さんと齋藤さんは、今のお話をどう思われますか。



齋藤 鈴子さん



宮本 みち子教授

及川 皆が集える場というのは大切に、仮設住宅に集会所ができて人々の表情は和らぎました。でも、その場にさえ行けない人たちもおられ、その人たちの顔を思い浮かべては支援の方法を考えています。

齋藤 被災当時、地震や津波被害と共に福島の人々は放射能という目に見えないものへの恐怖や不安感でいっぱいでした。学習センターに通えるようになり、学友と再会して集う談話室での情報交換や励ましの言葉で少しずつ心が解きほぐされました。また面接授業のグループワークで皆で一つのものを作りあげるという体験を共有するうちに、少しずつ皆の集う場に光が射し込み始めました。心にダメージを受けたのは子どもも同じです。家族や友だちを喪ったり、家族がバラバラになったり。人権擁護委員の活動の一つに人権教室というのがありますが、子どもたちの卒業の門出に、と地元の小学校からお話がありました。その子どもたちが中学校に進むと今度は中学1～3年生を対象に、と。「人権の種を蒔く」という表現がありますが、蒔いた種が芽吹き、やがて一つにつながって行く実感をひしひしと感じています。

宮本 「つながる」という言葉が出ました。安武さん、お寺での里親活動と「地域の活性化」プロジェクトとの間につながりはありますか。

安武 調査を行ってみて、地区の誇りとして「助け合い」や「人の好き」、「山村留学」を挙げる人が多く、学生も調査しながら人情の温かさに触れたと感想を漏らしています。実は、平成24年の小学校廃校と里親さんの高齢化を理由に山村留学は中止に。でも、同地区の住民の心は、お寺の里親委託というかたちで受け継がれ、子どもたちは里子も含めて地区全体の宝として育っています。これも大切な地域活性化で、その意味ではつながっていると思います。今回の活動はまだ始まったばかりですが、かつらぎ町全体でも人口減少を抱えており、今後の取り組みがそちらにもつなげられたら、と考えます。

地域貢献リーダーを 育成するために



宮本 本年4月から〈エキスパート〉に「地域貢献リーダー育成プラン」が加わりました。10科目をワンセットで学び地域貢献リーダーを目指すというもの

ですが、科目が限られるだけに工夫が必要です。先ほどきっかけ作りが大事という話もしました。皆さんに続くリーダー育成のためにアイデアを頂戴できますか。

安武 今回、この活動を進めるに当たって私たちは和歌山大学の先生方の講義を受けました。調査方法と古文書解読について。このように実際に活動して初めて出てくるニーズがあります。そこで、地元の核となる大学の教員を講師とする地域裁量の科目を設けてはいかがでしょう。またこの連携が進めば、例えば新城地区の草刈りに和歌山大学の若い学生にボランティアを依頼する、といった地域活性化の一助にもなるのではと思います。

齋藤 学習センターが地域振興の拠点たりうることがもっと浸透すれば、出入りする人のパイプが広がり、地域貢献の可能性はさらに広がります。私の地域貢献は公民館から始まりましたが、学習センターも同じ生活圏内にあります。センターが公民館のような場になれば地域貢献の輪は広がります。私は「放送大学そのものが地域貢献だ」と思っています。

島山 企業との連携を強化されては。インターンシップという仕組みはありますが、わずか1週間。仕事は分からず、企業も人物を見極められない。地域貢献度の高い企業で長期に活動することで、互いを見極め、放送大学と企業双方でリーダー育成につなげる、そんな仕組みが必要と考えます。

及川 先生の講義をナマで聴くには仙台まで出かけねばなりません。でも仙石線は未だ復旧せず、仮に復旧してもその時間さえ取れないという現状があります。ですから、出張講義というものがあるととても助かります。それも対象を一般の方にまで広げれば、地域貢献の担い手となる人材の裾野は広がると思います。また、卒業してからも交流できる仕組みがあれば嬉しいですね。先生からアドバイスを頂戴できたり、逆に例えば震災後のフォローを卒業生に呼びかけたり、と。

宮本 教職員、在校生、卒業生が一体化した人材バンクのような仕組みですね。出張講義、地域裁量科目の導入、地元大学や企業との連携、学習センターの更なる活用…たいへん貴重なご意見を伺いました。本日は、どうもありがとうございました。

放送大学 学生エッセイ コンテスト

エッセイコンテスト実行委員長・同選考委員
心理と教育 教授

住田 正樹

2013年度放送大学
エッセイコンテスト(第6回)
の受賞者が決定いたしました
ので、ご報告いたします。

今回のテーマは、「未来」でした。第1回(2008年度)から第5回(2012年度)までは放送大学との直接的な関連性を持たせるようなテーマでしたが、2013年は放送大学創立30周年という記念すべき年でしたので、更なる飛躍を目指してという意を込めて「未来」としました。そして今回から新たに選考基準を明確にすることにいたしました。

①テーマに沿った内容であるか、②文章全体の構成ができているか、③分かりやすく読みやすいか、④テーマについての自分の気持ちや考え方が自分の言葉で表現され、読み手に伝わる内容であるか、という4点です。

これまで応募者はおおよそ50人前後でしたが、今回はこれまでの2倍の104名(男性64名、女性40名)でした。選考委員全員で先の基準にしたがって選考いたしました。どの作品もユニークで選考はなかなか困難でした。いずれも文章もよく練られており、構成もよく工夫されており、また形式も短詩のようなものから短編小説を思わせるようなものまであり、内容も自身の体験を踏まえての着実な未来をみたものもあれば明るい将来を希望を持って描くというものまであり、実に多様でした。

選考はエッセイコンテスト実行委員会による第1次選考およびエッセイコンテスト選考委員会によ



る第2次選考を経て行われ、次の10名の方々が受賞されました。

受賞者	作品名	学習センター
最優秀賞		
中村 ゆみ	on the way	北海道
優秀賞		
織田 祐子	未来はここから	岐阜 卓
小林 妙子	ふたたびの未来	岐阜 卓
村山 美和	私へのギフト	東京文京
佳作		
浅田 光子	七十の手習い	静岡 岡
今野 啓次	今を生きる	埼玉 玉
佐藤 マサ子	学び、未来をつかむ	埼玉 玉
鈴木 寛之	未来への助走始めました	神奈川
玉田 啓子	ここ君と私の時間	東京文京
福田 一夫	人生の勝利に向けて、未来への誓い	栃木 木

※各賞毎の氏名は50音順です。※学習センターは応募時のものです。

講評

最優秀賞「on the way」

北海道学習センター/中村 ゆみ さん

人が一生かかって得られる知識や知ることのできる世界はほんの僅かに過ぎない。学びは常に「道半ば」でしかない。しかし学ぶことによって目の前に次々と新たな扉が開き、新たなことを学んでいくことができる。新たなことを学ぶことの楽しさと心の弾み。そして学ぶことができるという幸せ。学ぶことの原点を考えさせられるエッセイです。

優秀賞「未来はここから」

岐阜学習センター/織田 祐子 さん

学ぶことが役に立つかどうかはわからないし、地方で学ぶことの困難もある。だが、学び方を工夫することによって困難を克服し、生活を充実させていくことができる。学ぶことは小さな意味しかなくとも知れないが、しかしそれこそが自分にとっては未来を創っていくことなのだ。自分自身の学習法を工夫しながら学んでいくことの大切さを綴ったエッセイです。

優秀賞「ふたたびの未来」

岐阜学習センター/小林 妙子 さん

何をやってもうまくいかない自分。毎日が不平不満と愚痴だったが、友人の「でも自由でしょ」という一言で考え方が一変し、放送大学に入学。学んでいくうちに友人もでき、いろいろな人との出会いもでき、希望を持てるようになり、毎日が楽しく感じられるようになった。再び未来を手に入れたのだという幸福感。勇気が湧いてくるようなエッセイです。

優秀賞「私へのギフト」

東京文京学習センター/村山 美和 さん

実生活のなかで経験してきた困難、悩み、あるいは要求、だがそれを受け入れてくれない現状に対する苛立ち。そのために一時勉学を中断するものの再び学習意欲が湧いてきて新たな学習に向けて踏み出し、その先の未来を見つめていく。だが、その未来がその先にまた新たな未来を生み出していくという未来の連続性が感じられるような力強いエッセイです。

入選した作品は、放送大学ホームページで読むことができます。
http://www.ouj.ac.jp/hp/o_itiran/2014/260415.html

第6回エッセイコンテストの表彰式が大学本部で行われました。

最優秀賞を受賞された中村ゆみさんはご都合により欠席されましたが、4名の受賞者の方が、岡部学長から賞状と副賞が授与されました。授賞式の後、岡部学長や、エッセイコンテスト実行委員、選考委員の先生方と受賞者の皆さんとで、和やかに懇談をされました。



第6回

放送大学
学生エッセイ
コンテスト

最優秀賞受賞作品

on the way

教養学部 人間と文化コース
北海道学習センター

中村 ゆみ

私の中で未来という言葉の持つイメージは真っ白なキャンパスに夢に向かって筆を加えてゆく姿。または製作途中のキャンパスの完成予想図である。オギャーと生まれたばかりの赤ちゃん。小学校で授業中に元気よく手を上げる生徒達。入学式や卒業式で張り詰めた表情の少年や少女。皆「未来」という言葉がふさわしい年代だ。

人生の中継地点。いや元気に暮らせるであろう標準的な年数なら、折り返しはとうに過ぎている47歳。既に、私のキャンパスには中途半端に曲がりくねった線が、アンバランスな色彩で描かれていた。その上に何を塗りたいくても、この先それが美しい風景画に仕上がることはないであろうという頃に、通信制の短期大学へ願書を出した。

理由は、やってみたい。なんとかなるだろう。自分の携わっている仕事とは直接かかわりがないけれど、異文化や語学に憧れがあった。何よりも大学という所で学んでみたかった。

そのころは三人の娘達の受験や卒入学の連続で、まわりの人からは「何も今始めなくても、子育てが落ち着いてからでいいでしょう」と諭された。

が、私にとっては今だった。時に良いか悪いか、出来る出来ないにかかわらず、理屈抜きに“ポン”とスイッチを押してしまうことがある。その時はそんな気持ちだったのだろう。晴れて学生となり、頻繁に首都圏へスクーリングに通い、長時間かけて試験会場へ向かった。そんなひと時が暮らしの中のスパイスになり本当に楽しかった。そう思えるのは今ではそれが浄化された思い出であり、当時は必至の形相で息も絶え絶えだったのかもしれない。

三年間でその短大を卒業し、しばらくたった頃、知人から放送大学を勧められた。

調べてみると、授業は放送を媒体とし、面接授業は札幌の学習センターで開講されるとの事。単位認定試験も車で20分の隣町で受けられる、まさに夢のような大学だった。早速「人間と文化コース」に編入した。興味が有り、学びたい放送科目と、面接授業も日程調節が可能な数回にしばり登録した。



北海道学習センターがある、広大な北大キャンパスに、一歩足をふみ入ると小躍りするほどウキウキと心が弾んだ。そして、小さな田舎町で暮らす私にも、壮大な時空を超えた世界が広がったのだ。たとえば、総合科目“文学のエコロジー”との出会いによって、自分が大好きな書籍がいかにして現在の姿や流通システムになったのか。またそこに至るまでには先代達の命を削るほどの葛藤や、戦いがあることを知った。それまでただ名前を耳にしたことしかなかった異国の歴代の作家の苦悩や願い、暮らしぶりを学び、彼らが生身の人間として身近に感じられ、さらに知りたいとの好奇心も沸いてきた。そんな知のシャワーを浴び、素晴らしい先生方や学友と出会い。あっという間に卒業の日はやってきた。

そして先日、丁寧に梱包された学位記が届けられた。

次は修士選科生として学びを掘り下げようと思う。今後ずっと“道半ば”。まだまだ世の中には未知のことばかり。一般の人が一生かかって得られる知識や目の当たりにできる世界は全体規模で考えた時、ほんのわずかなのだと、学ぶほどに思い知る。だが、それを知ろうと自ら働きかけるのと、そうでないのとではその差は歴然なのだと思う。

放送大学は広い門戸で私たちを受け入れてくれる。面接授業の時、ある先生のおっしゃった言葉。「あなた達は幸せですよ。学べるのですから」が心に残る。(以下略)

全文は放送大学ホームページに掲載しています。
http://www.ouj.ac.jp/hp/o_itiran/2014/260415.html

HIV陽性者の「生活の質」向上をめざして

日本ではHIV陽性者の数は2万人を超え、年間約1500人の新規陽性者が報告されています。先進諸国では日本のみが増加している、というメディアの論調がよくありますが、それは本当ではなく、欧米でも増加傾向にあります。同時に、HIV陽性であっても、治療はできないものの、かなり健康状態を保てるような治療薬が開発され、普及しています。とはいえ、それでは、HIV陽性になっても大丈夫なのか？と問われると、「ノー」と言わざるを得ません。

私が研究しているのは、特に日本国内のHIV陽性者の「生活の質」に着眼し、彼らがいかに暮らしやすい社会を作っていけるのかについて、調査研究をしつつ、実践につなげていくというものです。たとえばHIV陽性であることを周囲の人、ときには家族にさえも打ち明けることができず、結果として孤立しがちであることも指摘されています。セクシュアルヘルスについてあま

り相談先がなく、悪化していきがちなのも特徴のひとつです。こう

した諸課題に取り組んでいます。

一貫して心がけているのは、当事者参加型の研究をするという点です。つまり研究の企画から実施、発表、成果の還元に至るまで、当事者とともに実施することです。「研究のための研究」に陥らせず実践に役立つ研究を行うことができると考えているからです。

なお、私が関わっているプロジェクトのなかに「HIV陽性者向けの総合情報サイト」があります。ぜひ訪問してみてください。http://futures-japan.jp/

第27回日本エイズ学会学術集会 総会(熊本)での研究報告



私の研究

商社マンになるはずが、いつの間にか、(憧れの)フランス文学の道に進んで、身のほど知らずにもルネサンス文学を専門にした。ラブレー(1483-1553)で修士論文を書いたが、案の定、行き詰まった。《ガルガンチュアとパンタグリュエル》は、なんとも型破りの文学だ。言語的カオスを逆手にとって、文学の世界でフリージャズを演奏したという感じか。あるいは、文体や思想のバルロイアルといえようか。とにかく論じにくく、搦め手から攻めることにした。『パンタグリュエル』『ガルガンチュア』が出版された都市に焦点をしばって『本の都市リヨン』(1989)を書き上げたのだ。「社会史」の影響も強いが、望外の評価を得た。文学研究者としては、これだけでは格好がつかないので、『ラブレー周遊記』(1997)を上梓、どうにか面目を施した。その後、書物史では中世から19世紀までと時代を広げ、その勢いでバルザックやゾラにも手を出した。編者として《ゾラ・セレクション》全11巻を出したものの、しょせんは寄り道だ。で、最近は原

点に帰って、ルネサンス文学に専念している。『神をも騙す』(2011)などの著書もあるが、研究者人生も第四コーナーを回り、もっぱら翻訳にエネ

ギーを注いでいる。ラブレーの新訳は終わり、モンテーニュ『エッセー』も第三巻と、クライマックスを迎えた。外国文学は、(優れた)翻訳がないことには、受容されない。が、翻訳には賞味期限がある。いかなる名訳も例外ではない。研究はだれかがやってくれる。新たな翻訳の力で、古典を継承していくほうが価値があると信じているのだが…



ラブレーとモンテーニュの翻訳を手にして

新しい福岡学習センター

福岡学習センターの移転

福岡学習センターは、博多駅近くの博多織会館から九州大学筑紫キャンパス（春日市）E棟の4階、5階に、この4月移転しました。3月30日に開催された移転記念式典では、白井理事長の挨拶の後、九州大学総長、福岡県立大学長、春日市長および大野城市長からの祝辞があり、地域との連携に対する期待が述べられました。福岡学習センターが九州大学箱崎キャンパスに初めて設置されたのは平成2年でした。平成10年には、講義室が手狭になったこともあり博多織会館に移転し、今年4月から再度九州大学キャンパスに戻ったわけです。古くから在籍し、九州大学箱崎キャンパスの時代を知る学生にとっては、待ちに待った移転であったようです。

新しい学習センターは、廊下等を除き、床面積約990㎡で以前の2割増しとなっています。講義室は1室増えて4室で、総席数は282席となりました。以前のように、単位認定試験で、隣り合わせの席が近すぎて混乱したり、面接講義の定員制限といった問題は解消されるでしょう。学生さんのための部屋も2室となり、単位認定試験や面接授業時の懇談が容易となり、サークル活動もより活発になることが期待されます。視聴学習室は独立し、静かな環境下で勉学に励むことができます。そのほか、所長室、事務室、図書室および客員教員室はほぼ従来と同じ大きさです。

ただし、環境（風景）は、大きく変わりました。博多織会館は、博多駅近くの繁華街にありま



新しい福岡学習センター

したが、今度の学習センターは緑豊かなキャンパス内にあり、春の桜並木や秋のアメリカ楓の紅葉が非常に美しく心を慰めてくれます。さらにキャンパス内にある図書館、食堂、生協等を利用でき、アカデミックな雰囲気での教育・研究が可能となると、学生・教職員一同、期待しています。

福岡学習センターの特徴

福岡学習センターには、北九州サテライトスペースも含め、平成25年度2学期現在2451名（うち大学院生が134名）の学生が所属しています。客員教員は10名で、心理学のほか歴史学、経済学、保健学とその専門は多岐にわたっています。先生方には、通常の学習相談のほか、一般人も対象にした公開講座をお願いしています。面接授業は、昨年度60コマを開設しました。心理学関連等の通常の面接授業に加え、「九州国立博物館」、「福岡県立美術館」、「九州歴史資料館」、「北九州市立文学館」、「北九州いのちのたび博物館」という地域の多くの博物館等と連携した特色ある面接授業も実施しました。全国各地から学生が参加し、定員を上回るほどの人気でした。来年度は、新たに「福岡市美術館」も加え、さらに魅力ある面接授業にしたいと考えています。



そのほか、学生の交流を兼ねた研修旅行を毎年9月に行っています。昨年度は、熊本城～細川刑部邸～柳川を旅するバス旅行でした。福岡学習センターは、学生の皆さんが興味を持ち、参加しやすい公開講座、面接授業さらには研修旅行等を企画して、今後とも皆さんの学習支援を続けたいと思います。

福岡学習センター

春日市春日公園6-1(九州大学筑紫キャンパス内E棟4・5階) 〒816-0811
JR大野城駅西口から徒歩7分 電話:092-585-3033

食安全性学('14)

放送大学教授 (生活と福祉) 小城 勝相 北海道大学名誉教授 (放送大学客員教授) 一色 賢司

食の安全性に対する不安が広がっている。自然界には原発事故とは無関係に元々放射性物質が存在するし、重金属、病原性細菌、ウイルス、自然毒も広く存在する。さらに現代の高感度な測定機器を使えば、どこの水・空気・食品の中にも微量の発がん物質が検出できる。重要なのは量の問題であり、この食品は安全か危険かという二者択一で評価することはできない。安全・安心という言葉が流布し、安心=ゼロリスクを主張する声があるが、そのような要求の達成は不可能で無意味なことである。しかも、化

学物質の毒性等

は残念ながら科学的にすべて解明されているわけでもなく、今も基礎的研究が世界中で進行しており、新たなリスクの発見も珍しいことではない。このような状況の中で、この講義により食の安全性に関する科学的な理解を深め、それに基づいて社会制度としてどのような対策が必要なのかという問題に対して理性的に議論できる素地を養い、新たな問題が発生したとき、その時点で信頼できる情報を得る方法を身につけていただければ幸いである。



小城
勝相
教授



一色
賢司
教授

社会心理学('14)

放送大学准教授 (心理と教育) 森 津太子

本科目は社会心理学の入門的な内容を扱っていますが、一般的な入門科目とは異なり、各回一冊ずつ、著名な社会心理学の書籍を紹介するという形式になっています。このような形式にしたのは第一に、本科目を通じて、社会心理学の研究の醍醐味や社会心理学者たちの考えを、よりみずみずしいかたちで味わってもらいたいという思いからです。また受講生の皆さんが、興味を持った内容について、自発的に学習を進めていく際のガイドブックのような役割ができればとも考えました。そのため本科目で取り上げる書籍は、「学問的

な貢献が大きく、社会心理学を学ぶ上で知っておきたい、社会心理学を代表する書籍であること」を最優先としながらも、一般の読者を想定して書かれており、外国の書籍である場合には邦訳書が出ているものに限定しています。

社会心理学が扱うテーマは誰にとっても馴染み深いものですが、社会心理学を学ぶことで自分や他者をこれまでとは違った視点で見ることができるようになります。ぜひ楽しみながら学習を進めていってください。



森
津太子
准教授

心理臨床の基礎('14)

放送大学教授 (心理と教育) 小野 けい子

近年臨床心理学への関心が高まっています。この科目は、臨床心理学の概論を述べた科目ですが、「心理臨床の基礎」としたことは、意味があります。一般に学問としては「臨床心理学」という用語が、臨床心理学の実践には「心理臨床」という用語が用いられますが、実践の学である臨床心理学は、伝統的心理学の発展から生じてきたのではなく、児童相談・医療・教育・職業指導など様々な現場からの要請に答える実践の中で発展してきた歴史があります。心理臨床の知識

は、日々生きた現場で必要とされ、実践と研究がなされています。この科目は、「心理臨床の基礎」として、臨床心理実践の基礎としての特徴がよくお伝えできるものとしたかったのです。善意や情熱のみに基づく援助とは異なる、人の心の理解に基づく心理臨床の理論と実践について概説したこの科目を学ばれることで、自分自身や周囲の人々への理解、人生への理解を深めるものにもなることを願っています。



小野
けい子
教授

アグリビジネスと日本農業('14)

放送大学教授 (社会と産業) 河合 明宣 放送大学客員教授 堀内 久太郎

グローバル化が進みますが、わが国農業の大半は小規模の家族経営で営まれています。一方、社会的分業が高度に進み、食料供給に関わる産業の種類・分野が、食品加工産業、流通業・外食産業などとの連携によって著しく拡大しています。このような新しい食料供給産業を構成する事業体を総称するアグリビジネスという言葉に注目し、家族経営の変化、食品加工業や外食産業の発展、そして安全な食と環境の問題を国際的視野も入れて説明します。

グローバル化に対応して新しい農業経営が登場し、



河合 明宣 教授



堀内 久太郎 教授

成長を続けています。他方、特に中山間地の農村では、高齢化や過疎化が着実に進み、農業の担い手が存在せず、農村の大切な機能が失われています。高度経済成長を支えたものづくり中心の産業構造は、今日、大きな転換点を迎えています。高齢化社会においても、健康で安心して次世代を担う子供たちを育て、豊かな生活をおくるために、第一次産業としての農業の大切さがあります。それを「産業および国土の均衡発展」という言葉でお伝えしたいと思います。

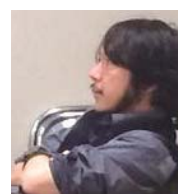
文化人類学('14)

放送大学教授 (人間と文化) 内堀 基光 桜美林大学教授 (放送大学客員教授) 奥野 克巳

人類には種(しゅ)に特有な能力として文化というものがあります。現実の世界のなかで文化は、人間集団(社会)に応じてさまざまな様態を取るわけですが、そうした多様な様態を、多くの場合現地調査にもとづいて探る学問が文化人類学と呼ばれるものです。この学問は、そこからさらに、人類そのものの存立の基盤を深く問い直していこうとします。自らのものとは異なるとされる文化・社会への視線であるとか、ものごとの価値づけに関する相対論的な思考といった特徴が、ながく文



内堀 基光 教授



奥野 克巳 教授

化人類学をするしづけてきましたが、それらの特徴は、こうした批判的な問い直しを基礎づける営みの一環だと言えます。異なるものへの視線とはけって好事家的な視線ではありませんし、相対論的な思考は、西洋近代の社会の価値観を普遍的なものとする固定した観念からの解放を目指すものでした。この講義群では、こうした批判的な知としての文化人類学の意義を語ることに力点を置いています。

記号論理学('14)

放送大学教授 (情報) 加藤 浩 大学評価・学位授与機構教授 (放送大学客員教授) 土屋 俊

私たちは日常生活においてさまざまな推論を行っています。推論とは前提となる一群の命題(真偽が問える文)から結論となる命題を導くことです。推論にもいくつかの種類がありますが、その中でも本科目で取り扱う演繹的推論は、それが妥当であるならば、その正しさを誰もが認めざるをえない必然性を持っているところから、最も強力な推論といえます。議論の正しさは推論の妥当性に依っていますので、論理学は社会における議論はいうまでもなく、あらゆる学問の基礎といえます。特に



加藤 浩 教授



土屋 俊 教授

哲学、数学、計算機科学などには、直接的に関係しますので、それらの科目を学ぶ上でも必須です。

なお、本科目では推論の妥当性をチェックする方法としてタブローの方法を採用していますが、その学習を助けるために簡単にタブローが描ける「タブ朗」というWebアプリを開発し、公開しています。URLは放送番組内でお知らせしていますので、ぜひ番組をご覧になってタブ朗をご活用ください。

情報社会のユニバーサルデザイン('14)

放送大学教授
(情報)

広瀬 洋子

同志社大学教授
(放送大学客員教授)

関根 千佳



広瀬 洋子
教授



関根 千佳
教授

今日、インターネット、携帯電話等、情報通信は社会の基盤であり、教育・ビジネス・放送などあらゆる分野に密接に関連しています。今や、情報技術を円滑に利用できない事は大きな社会的不利益に繋がります。しかし、それらは子どもや高齢者、外国人、障害者にとって使いやすいものなのでしょうか。

「ユニバーサルデザイン」とは、年齢や性別、能力や背景に関わらず、できるだけ多くの人が使えるよう、最初から考慮して、まちやもの、情報やサービスを作るという

考え方であり、そのプロセスを意味します。

この授業では、情報とユニバーサルデザインをキーワードに、多様な人々が誰一人取り残されない社会をつくるために、どのような考え方や技術が求められているのかを具体的に学んでいきます。まちづくり、高齢者市場、障害者対応のICT、大学における障害者支援、放送メディアの将来など、これからの社会を生きる上で大切なことを共に学んでいきましょう。

生活と化学('14)

放送大学教授
(自然と環境)

濱田 嘉昭

学習院大学教授
(放送大学客員教授)

花岡 文雄



濱田 嘉昭
教授



花岡 文雄
教授

「生活」という言葉を皆さんはどのように理解し、使っていますか。おそらく、毎日の衣食住を維持・継続し、それに必要な経済基盤を確立するための労働(勤務)、場合によると子育てや教育、あるいは娯楽など文化活動を含め、「暮らし」に近い意味合いで使っているのではないのでしょうか。

一方、「生活」とは「生命活動」あるいは「生存活動」の略という説明もあります。生物である“ヒト”としての本源的な活動という意味です。本科目「生活と化学」では、

この意味における“ヒト”と、文明的・文化的な“人”としての生活に“化学”がどのようにかかわっているのかを考えたいと思います。そして、現代の物質文明にどのような問題と課題があるのか、それを解決し、さらに創造的な活動に発展させるための基礎的な知識を提供したいと考えています。「通信指導」や「単位認定試験」でも、できるだけ受講生との双方向性が出るような問いを出し、さらに質問を受け、回答を発信したいと考えています。

死生学入門('14)

放送大学教授
(生活と福祉)

石丸 昌彦



石丸 昌彦
教授

「死生学とは、いったい何ですか?」という質問をよく受けます。初めは少し心外でしたが、最近では内心「しめしめ」と思いながら、次のように答えることにしています。「受講すれば答えがわかります。ぜひ受講してください。」

実際、これほど大切な人の知の営みが認知されず、放送大学の充実した教養のラインアップの中に場所をもたなかったのは、たいへん不思議なことでした。授業でも触れるように、日本人は豊かな死生観の伝統をも

ちながら、このところ「死生」の問題から目を背けて暮らしてきたのです。ある不幸な事情がそうした傾向をもたらしたのですが、21世紀に入る頃から風向きが変わってきました。「死」を通して「生」を考える姿勢が、今では至るところで再生の萌(きざ)しを見せています。そのありさまを展望するのが、この科目の目的です。

授業ではユニークな顔ぶれの6人の講師が案内役を務めます。どうぞ楽しみにお越しください。

家族心理学特論（'14）

国際医療福祉大学大学院教授 亀口 憲治
(放送大学客員教授)

亀口 憲治
教授



初のテレビ放送による『家族心理学特論』の講座が開設されました。家族心理学の基礎から家族療法の臨床実践や地域支援、さらに家族心理士、家族相談士の資格取得等の最新情報を、網羅的に俯瞰できるように工夫しました。家族に関する問題解決の解説を耳で聴くだけでなく、テレビ画面で歴史的な資料映像や本邦初公開の秘蔵映像を確認できます。また、日本の家族を対象にした家族療法や夫婦療法の実際の面接場面を再現した動画も、後半の複数回で視聴

できます。

欧米由来の家族心理学を、我が国独自の文化・歴史的な視点から見直すために、明治維新後の文明開化の負の側面を予見した夏目漱石のエピソードを随所で取り上げました。漱石一家がすでに百年以上も前に、現代家族と同様の心理的問題に直面していたことを知り、さぞ驚かれることでしょう。多くの受講者の方々が、この新たな視点に立つ研究課題の魅力に引きつけられることを期待しています。

社会的協力論 —協力はいかに生成され、どこに限界があるか（'14）

放送大学教授 坂井 素思
(社会経営科学プログラム)

坂井 素思
教授



今回の大学院科目では、「協力学」という新しい社会科学分野を開拓する試みを行いました。人びとがなぜ協力し合うのか、この行動の基礎には何があるのかを知りたいと思ったのです。交換モデル、支配モデル、互酬モデルとして知られてきた、近代の協力活動が、どのように生成され、どこに限界があったのかを追究しました。とくに力を入れたのは、テキストとそれに加えて、ラジオのインタビューです。横濱ジャズブロードムナード、所沢市役所、横浜名画座ジャック&ベティ、神奈川県庁、赤十

字社、合同会社たすたす、松本クラフトフェア、武雄市図書館、宮城県亘理町苺農家、琉球大学保健学科、板橋区介護ケアチーム、松本サイトウキネンなどに見られる協力活動を巡って歩き、取材録音を長時間行い、これら協力活動の事例が伝わる工夫を行っています。わたしたちが行っている日常の協力活動が、どのような基本的性格を持ち、どこに問題があるのかを、これら事例のインタビューを聴きながら、一緒に考えていただけたらと思っています。

知的創造サイクルの法システム（'14）

放送大学教授 児玉 晴男
(情報学プログラム)

児玉 晴男
教授



本講義は、知的財産の創造、保護および活用に関する法システムである知的財産権法を新しい観点から解説しています。知的財産の保護のための著作権法と工業所有権法（産業財産権法）の国際的な枠組みは19世紀末に形づくられ、不正競争防止法も含めて、知的財産権法の主要な3つの法体系は130年ほど前にできています。その当時の理解とは異なり、今日、知的財産の著作物や発明等は、特にデジタル環境において相互に連携し融合して多様な面を見せています。

本講義は、知的財産の保護に関する古くて新しい知的財産権法を三つの観点で解説しています。第一は、知的創造活動が知的財産権法で保護される前後を含めて見えています。第二は、知的財産権法制の著作権法と産業財産権法等を比較対照し見えています。第三は、知的創造サイクルの中における創作者の人格的権利と経済的権利のライフサイクルの関係から見えています。私と一緒に、知的冒険を味わってみませんか。

放送大学国際シンポジウム(OJIS) 2014開催

教育支援センター教授 青木 久美子



2014年2月7日（金）幕張国際研修センターにて、放送大学国際シンポジウム（OJIS）2014を開催した。従来、幕張メッセの国際会議場で開催していた国際シンポジウムであるが、今回、放送大学の道路を隔てた隣の元OVTAが幕張国際研修センターとしてオープンしたため、そちらを借りて開催することとなった。今回のテーマは「世界に広がるオンライン教育の潮流」であり、昨今、MOOC（大規模公開オンラインコース）を初めとするオンライン大学教育が話題となっているため、事前登録者数は188名にも上った。実際に当日参加した人数は関係者も

含めると181名であり、会場はほぼ満席であった。

講演者は、元英国オープン・ユニバーシティ学長のジョン・ダニエル卿を初め

とし、フィリピン公

開大学学長のグレース・アルフォンソ氏、英国オープン・ユニバーシティのオープンメディア部長のアンドリュー・ロー氏、オーストラリアのマードック大学教授のジャン・ヘリントン氏、それに、本学学長の岡部洋一氏と錚々たる顔ぶれであった。質疑応答を交えてそれぞれ約1時間の講演ののち、パネルディスカッションを行った。

オンライン教育は、従来の教育を提供する新しい器ではなく、全く新しい形の教育の可能性を秘めている。MOOCや無料のオンライン教育によって、学習者の選択肢が広まっただけではなく、教育を提供する側にも、教育とは何か、大学の在り方とは何か、といった見直しが迫られてきている。教育を提供するものとして、大変興味深い時代に生きていることを感じさせられた1日であった。



就任のごあいさつ

放送大学をキャリア形成と 社会貢献の拠点に

副学長 宮本 みち子



このたび、副学長を拝命しました。どうぞよろしくお願いいたします。私は、学生たちが職場の激務やリストラ、介護や子育ての責任、被災体験や病気や障がいを抱えながら学び、時代に流されない強さを体得していく尊い姿をたくさん見てきました。放送大学は、性別や年齢や諸事情に関係なく、いつでもどこでも学ぶことができる日本最大の大学です。帰属できる確固とした組織や集団がなくなり、丸裸の個人と化してしまうような時代のなかで、放送大学は働き・暮らし・社会に参画する力を提供できる拠点であることが強く求めら

れています。そのためには、社会の担い手である現役学生が、不安定な仕事の世界で職業キャリアを築いていく力を得ることのできる教育機関になる必要があります。また、豊かな人生経験と放送大学の学びをもとに社会に貢献できる人材を輩出する大学、つまり、放送大学がシニアの「人材バンク」になることを期待しています。創立30年を経て、時代状況が大きく変わった今、人々のニーズを汲み上げられる放送大学の革新が求められていると考えています。

はじめまして

生活と福祉 准教授 関根 紀子
生活健康科学プログラム



平成25年10月より生活と福祉コースの一員となりました。私の専門である運動生理学はとても範囲が広い分野ですが、現在は主に筋生理学、特に筋の萎縮について研究しています。健康や運動に関する話題というのは近年特に人々の関心をひきやすいものですが、正しく理解し実践するためには自分の身体に対する正しい知識が必要です。

放送授業でお目にかかるのはもう少し先ですが、少しでもみなさんの生活にプラスになるような話題が提供できればと思います。みなさんにお会いできることを楽しみにしています。よろしくお願いいたします。

一人の臨床心理士として、 そして、臨床心理学徒として

心理と教育 教授 倉光 修
臨床心理学プログラム



サイコセラピストないし心理カウンセラーの訓練を受け、実践活動を始めてから、40年近い月日が流れました。私の場合は、実践が即研究的要素を持っており、近年では、種々の心理療法を自分なりに統合し、個々のクライアントの役に立つアプローチを見出そうと努めてきました。心理療法の個性的統合を試みる場合は、有効であるというエビデンスを統計的手法で得ることは困難ですが、事例研究を精緻に行う中で、その道も見えてくるのではないかと期待しています。

放送大学に採用されたことによって、志のある人々と共に学び、新たな地平を開くことに貢献できればと気を引き締めています。

これからが楽しみです

人間と文化 教授 魚住 孝至
人文学プログラム



哲学・日本思想が専門です。禅・芸道・武道等の修行によって開かれる世界に関心があり、宮本武蔵や松尾芭蕉の本を著しました。また、存在への問いにより西洋哲学さらに現代技術文明を克服し、「新たな原初」へ移行する準備を目指したハイデガーを研究していますが、後期に言う「放下」は日本の思想にも通じると思います。今年度から院生の指導と哲学の科目の企画、次年度から卒論指導と面接授業、2016年度に「道を極める」(大学院科目・ラジオ)を予定しています。

さまざまな分野の先生方と交流し、外部の専門家にも協力いただいて、幅広い年齢層の、学習意欲が旺盛な学生さんと共に学んでいけるのが、とても楽しみです。よろしくお願いします。

生涯学習としての情報教育

情報 准教授 辰己 丈夫
情報学プログラム



2014年度から情報コースの教員となりました。今年度から始まる「情報のセキュリティと倫理(14)」の一部を担当します。情報社会は激動の社会です。いったん授業で学んだ内容でも、5年も経つと通用しないこと、言葉が変わってしまっていることもあります。一方で、情報科学などの基礎的な分野では、何十年経っても変わらないこともあります。そこで、生涯学習としての情報教育は、重要な役割を果たします。本学では、学生の皆様とともに、生涯教育としての情報教育を実践していきたいと考えています。

個人的には、数学と、facebookなどのSNSを利用した社会教育についても興味を持っています。よろしくお願いします。

放送大学への着任にあたって

自然と環境 教授 加藤 和弘
自然環境科学プログラム



本年度より本学でお世話になることとなりました。河川の珪藻類の研究に始まり、半乾燥地や里山の植物群落、都市緑地の植生と鳥類群集、噴火後の三宅島の鳥類群集など、調査地や対象生物を変えながら研究を続けていますが、関心は、生物を取り巻く条件と生物相との関係の理解とモデル化で一貫しているつもりです。ほかに、珪藻を題材として河川環境を学ぶ教材づくりの共同研究や、観賞用ハスを題材とした子供向けの観察会などにも関わって参りました。

これからは、生物に関わる様々な理論や知見を授業を通じて分かりやすく発信していくことに、力を注いでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

教養学部学生及び大学院修士選科生・修士科目生 募集

広報課・学生課

2014年度第2学期の学生募集を以下のとおり行います。

出願期間	2014年6月15日(日)～2014年8月31日(日)
可否通知等	2014年6月下旬～2014年9月中旬
学費の納入	2014年6月下旬～2014年9月末
入学許可通知	2014年7月上旬～2014年10月上旬
印刷教材等の配送	2014年8月下旬～2014年9月末
授業開始	2014年10月1日(水)

・放送大学に関心があるご友人、ご親戚他お知り合いの方にも、この機会にぜひ本学についてご紹介くださり、入学をお薦めいただくようお願い申し上げます。

また、2014年9月末をもって学籍が切れる学生の方で、2014年度第2学期以降も引き続き学習を希望される場合は、改めて入学手続きが必要となりますが、入学料が割引になります。

・出願締切日は**2014年8月31日(日)<必着>**です。

大学院修士全科生及び博士全科生 募集

教務課

放送大学大学院では、2015年度修士全科生及び博士全科生の学生募集を以下のとおり行います。

	修士全科生	博士全科生
募集人員	500名	10名
出願期間	2014年8月15日(金)～2014年8月31日(日)(必着)	
第一次選考(筆記試験)	2014年10月5日(日)	
第一次選考可否通知	2014年10月31日(金) 発送	
第二次選考(面接試験)	2014年11月22日(土)または 2014年11月23日(日)	2014年11月16日(日)
可否通知等	2014年12月12日(金) 発送	
学費の納入	2015年3月上旬～2015年3月中旬	
入学許可書・印刷教材等の配送	2015年3月中旬～2015年3月下旬	
2015年度授業開始	2015年4月1日(水)	

※詳細は、6月中旬配布予定の学生募集要項でご確認ください。

Open Forum(大学院教育研究成果報告)第10号について

教務課

このたびOpenForum第10号を発行しました。本書は大学院修士課程2012年度修了生の修士論文を基にした論文集です。各学習センターにて閲覧できますので、修士全科生の研究成果に興味のある方はご覧ください。また、各学習センター・本部(郵送のみ)において、販売も行っています。通常価格927円(本学学生価格742円)となります。お問い合わせは本部、各学習センターまたは本学ホームページをご参照ください。



編集後記

いつの間にか気温が上昇して初夏の気配を感じるこの頃ですが、今年度第1号のON AIRが出来上がりました。たくさんの興味深い情報が満載です。紙面に目を通すと、学位授与式での謝辞、“学びの成果を地域へ”座談会、エッセイコンテスト最優秀賞と、どれを読んでも放送大学学生たちの「なぜ学ぶのか」「学ぶことで何を得たのか」がいきいきと伝わってきます。学んだことが誰かの役に立っているという実感が、もっと学びたいという思いにつながる事がわかります。また、学ぶことを通して人との関係を豊かにしていく姿も見えてきます。そんな学生のみなさんに元気を頂いた思いがします。(前年度編集委員・宮本みち子)

放送大学通信 オン・エア 編集委員(2014年度)

委員長	教授	坂井 素思
委員	副学長	小寺山 亘
	教授	井出 訓
	准教授	岡崎 友典
	教授	御厨 貴
	教授	青山 昌文
	准教授	森本 容介
	准教授	安池 智一
編集事務担当		総務部広報課



放送大学

<http://www.ouj.ac.jp/> ISSN 1343-3369

ご意見やご感想をお聞かせください。メールアドレス editor@ouj.ac.jp